東京都銀座民友社　徳富蘇峰先生　親披[[1]](#footnote-1)　／　朝鮮京城　李光洙

蘇峰老先生

朝鮮の秋は短い代りに朗なものと存候。殊に今日の忠南の天気は代表的の朝鮮の秋日和、コスモスの亂咲きたる金波の田面、朝鮮を熱愛さるゝ先生の俤を偲ばずには措かず候。小生儀、今般日本の家族[[2]](#footnote-2)並びに文学研究の為、東京へ罷出づる予定に候ひしも、大演習終了後ならでは小生如き朝鮮人の渡航罷りならずとの厳しき御法度、已むなく中止仕候。先生の御慈容を拜する日の遠きを憾申上候。

朝鮮人の渡航の制限は益々嚴しく致す内務省の方針の由、朝鮮人の民族的感情の消耗を憂ふる老婆心とても解すべく候哉、誠に微妙なる感じを與ふるものに御座候。妄言御宥恕願上候。早々

乙亥十月九日　李光洙　鞠躬

1. これは徳富記念館に保管されている李光洙からの最初の書翰である。温陽温泉の神井館という旅館備付けの封筒と便箋に書かれ、封筒の「親披」の文字のうえに「上京 延引 遺憾 その他」と赤字で書かれている。徳富蘇峰記念館の塩崎氏の説明によれば、これは前もって書翰に目を通していた秘書が書いたものだという。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 妻の許英肅はこのころ三人の子供を連れて東京の赤十字病院で助手をしながら産院開設の準備中だった（許英肅「나의自叙傳」『女性』1939.2）。李光洙の息子の李榮根氏は、父親が温陽温泉でともに一泊したあと釜山の船乗場まで来て見送ってくれたことを追憶しているが（李榮根「이런일 저런일」이정화『그리운 아버님 春園』우신사,1993,203쪽）、この手紙により、李光洙は渡航許可が出なかったため同道を断念したことがわかる。李光洙はこの年末に東京に行き、家族とともに正月を迎えた（「東京の思ひ出」『三千里』1942.1）。つづいて５月と６月も東京で過ごしたが、そのさいもやはり渡航証明書のために苦労している（「東京求景記―渡航証明書」『朝光』1939.9）。 [↑](#footnote-ref-2)